

震災4年の重み

「3・11」関連の特集記事を多く読んだが、やはりノンフィクション作家・柳田邦男さんの「言葉」は重いものがある。写真は毎日新聞 3月12日夕刊の特集ワイド「この国はどこへ行こうとしているのか」であり、震災4年の重みを柳田さんの「言葉」からたどりたい。

安倍首相がインフラ整備に触れながら、復興ぶりを力強くアピールしたのにたいし、「それは表面的だ」と言う。「生身の人間レベルで捉えないと、真実は見えない。地域の未来像を示せない政治・行政の指導層の知的貧困が、歳月を経過するほどに多くの被災者の生活、人生を深刻なものにしている。その実態にこそ目を向けるべきだ」「現場に入り込まなきゃ見えないものがたくさんあるからね」と、この4年、被災地を30回以上訪れている。

「阪神大震災は甚大な被害をもたらしたが、多くの方は暮らし慣れた地に困難を抱えながらもなんとか戻れた。でも今回の災害後は津波の危険区域はもう住めないし、原発事故による放射能の汚染地域も住めない。4年たつのにどこで生きるかすら、見通しが立たない」深刻なのは子供たちだ。先の見えない親の不安定さが子供の心に影を落とす。人は時間の中で生きる存在、過酷な歳月は心や人間関係を破壊する「2次災害」をもたらす、ということだ。その「2次災害」が前例を見ないほど大規模に起きているのが、今回の特徴だ。災害関連死が福島だけで千数百人に上ることは、その象徴だろう。「政治の責任は重い」と言う。

「高度成長期以降ゆっくり広がっていた日本の負の部分が、一気に凝縮して顕在化したのが被災地です。しかも日々深刻になっている。人は将来に希望がないと、前向きに生きる力を失う。将来のビジョンと希望が見いだせる状況、これが『人間の復興』です。でも中央の被災地復興の視点は、経済やモノに偏っている」

今の状況は、巨大な負の経験をしたという意味で、敗戦直後と重なる。戦争を教訓とし、日本は憲法9条を手にして約70年間、戦争をしない国造りを進めた。「それと同じです。震災を教訓に本当に人の命を守れる国に生まれ変われるかどうか。この国は今、その分岐点にある」



(2015年3月16日)